般若寺　大字宍塚にある眞言宗の寺で、大日如來が本尊、元暦元年の創立、此寺の釣鐘（建治元年の銘ある）は國寶に指定された。境外の釋迦堂は弘安五年小田の臣土岐氏の造營なりと。

酒井爲太郎氏　大字飯田の人、慶應二年二月生る、尊農居士と號し、夙に農業の勃興を圖り、農村教育の急務を宣傳し、縣立農學校の創設及び實業教育の振興等、大に與つて力あり。郡長に建議して小學校に一坪農業を實施せしめ、且各町村教育會の普及振作を圖る等其の他大小の功績擧て數ふべからず。大日本農會及本縣等より賞を受けしこと亦枚擧に暇ない。

東　村

聖天山法泉寺　霞浦へ突出した大字大岩田にある、眞言宗で小田領常陸四ヶ寺の一、本尊佛は弘法作、弘法手植の大杉といふのが明治三十五年の暴風に倒れ、本堂は明治三十八年凱旋祝賀の煙火に燒失した、

九重村

廣岡原　蕨狩、茸狩、雉兎狩の好適地であつたが近年大方開墾せられた。又覺王寺といふが大字花室にある。

栗原村

櫻林の墳　元治甲子筑波義軍の殘徒此處に來り、土浦藩士に追詰められ、田土部渡船場に全滅した其屍を葬つた所、弔ふ者多しと。

堀織部正利淵　安政五年外國奉行であつたが、其後外人暗殺の嫌疑を被り、萬延元年屠腹して死す、年四十二。此栗原の地は堀氏の采邑で、恩威並び行はれ今も其遺德を慕ふものが多く、其碑は持福寺にある。

榮村

姿見神社　大字上境にあり、慶安の昔丸橋忠彌修驗者となりて此に居り、和歌三首を刻して納めたが其額今は酒井氏藏すと。

東福寺　聖德太子作の地藏菩薩を安置す。建長年間乘海阿闍梨の開基にて、現存の堂宇は、正德年間和州初賴、長谷寺慧海僧正の造營する所で、樓門の金剛力士は舊と筑波神社にありしを、明治維新の際當寺に移したもので雲慶作たることは筑波山緣起にも詳かである。

常磐線へ土浦から接續する筑波鐵道最初の驛は眞鍋で、戸數六百、人口三千餘、市街は近時土浦町に接續して來た。縣立土浦中學校は此處にある。

八坂神社　字天王前にある、鄕社である、傳へ曰ふ　後醍醐天皇が賜はつた高時征伐の綸旨を小田城主治久が大形村に祀りし神體なりと、應永十八年此地に奉祀す。

善應寺　眞言宗にて照井山と號す、聖觀世音堂は寛文十年土屋氏の建立で、境内に老覇王樹あり、奇觀を呈して居る。勤王僧佐久良東雄は曾て此寺の住職であつた。

總宜園　臺上にあつて、土浦、霞ヶ浦を展望すべく、眺望絶佳である。

筑鐵線——藤澤驛

藤澤村

藤澤城址　を見る、大字藤澤字中城にあり、高六米面積三千坪水田三方に繞り、隍壘今猶存する。天正年間小田氏治此に居り、十八年豊臣秀吉小田原城を陷れ、北條氏を滅した時、小田氏亦沒落し此城從つて廢せられた。

藤房遺髮塚　大字藤澤にあり、三島中州選文の碑を建つ。

神宮寺　元治の亂、藤原藤房の常陸に配流さるゝや、本寺を其幽閉所に充てられ、其遺書遺物今猶ほ存すと、遺跡の碑建つ。

斗利出村

法雲寺　後光嚴帝の勅願所で、足利尊氏の創立に係る。大雄山と號し、今の伽藍は獅林和尚の再建で、棟上菊桐の紋章あり、山門の額又菊桐紋章の長棒籠は近衞公の寄進である。

山ノ莊村

古戰場　大字小野最北小野越の中腹にあつて、元治甲子の變に筑波黨と土浦藩士との合戰した所。

清瀧觀音　小野の清瀧にある、眞言宗で、阪東二十六番の札所で、　椎古天皇十五年詔して之を創立す、本尊は聖德太子作、永祿元亀の兵燹に燒け、殿堂、寶物を失ひたるも尊體は依然存す。元祿十三年今の堂宇を再建した。

小野小町墓　小野村累代の里長小野源兵衞住宅地内にあり、傍に五輪塔あり、小野仙姫古廟記木像もあつて法名咏月院殿下崖了心大姉と記す。

東城寺藥師　大字東城寺の山上にあつて、延暦年間、桓武天皇の勅願により、最仙上人の開基に係る。行基作の藥師佛を本尊とす。小田氏の鬼門除祈願なるが、現在の殿堂は應和二年の建築である。

九社權現古墳　東城寺藥師堂後の丘陵上にあり、明治十二年岨潰し、古唐金壺一個露はる。中に經文一卷あり、外に六個發見、今帝室博物館に陳列してある。

一の瀧　右古墳から北方六町にあり、樹木鬱蒼の中、五丈餘の高所より落つ。下流は中津川となり、霞ヶ浦の高濱入へ流れこむ。

頭白上人功德碑　大字小高にあり、高約三、六米の五輪塔で、永正十二年二月頭白上人が母の功德を祈る爲めに建てたものである。上人の母稻葉が此地に差かかり、偶强賊の爲めに殺され、其死體の傍に生れ居りしが上人にて、時に明應四年八月二十五日であつたが、生れ乍ら頭髮白く、長して天台宗の僧となり、學德高く、衆生を敎化した名僧である。

七　會　村

大字下稻吉は神立驛に近い。

佐谷城址　大字中佐谷にあり、今は村上帝の朝三位七條信元の刻む天滿宮を祀る。

天滿宮　大字下佐谷にあり、天正の亂に兵燹に罹りしが、寶永二年現今の社殿を再建す。

福田助六　大字下佐谷の人、家世々里正なるが、領主本堂政家の暴虐に公憤を發し、二十五ヶ村の總代となり、江戸に上り老中松平定信の登城先に直訴し、刑に服す、時に年五十一。安永八年九月十二日であつた。後本堂氏其靈を祀り助六明神と稱す、土地の人今に至る迄其義を賞揚して居る。

出　島　地　方

これは北霞ヶ浦の高濱入と、南土浦入との間に突出し居る地方をいふので、七ヶ村あつて、水產及び蔬菜、果樹、柑橘果類を產する。

上　大　津　村（汽船發著は沖宿）

手野城址　大字手野にあり、一帶の高原にて周圍約七三〇米、今猶北部に隍壘があり、延慶の頃小田知繼之に居り佐竹氏に亡ぼさる。

海藏寺　曹洞宗で、應永年中八田知家の後裔常陸介治朝の開基、寺內に治朝の墓あり、義經と辨慶が合書せし若般經文數卷を藏す。

下　大　津　村

崎濱の横穴・大字加茂字平川より崎濱に至る道路の左側懸崖下に數個の穴あり、粘土と砂土との土壌中、非常に貝殻を交へた地層で、穴居の址ならんといふ。

崎濱天王　天仁元年六月素鵞尊再祭之と幣串に記しあり、幣串は毎年大祭毎に一枚を卷き添ふるを例とし、今之を檢べると四百餘枚を算し得、他は綿の如く滅裂して數へ難いと。

牛渡村（汽船發著す）

古墳　明治二十六年發掘して曲玉を得た、藤井某氏の畑地に屬す。

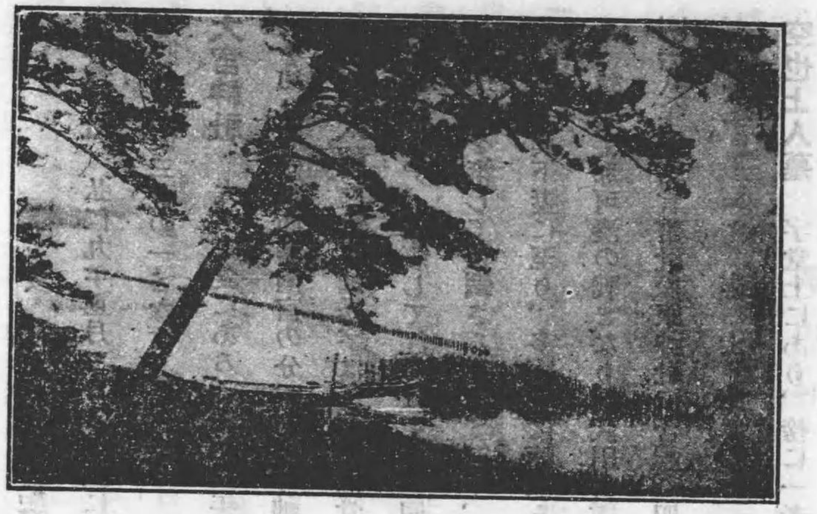
鹿島神社　大同元年の創立で、鹿島神宮へ勅使下り給ふ時は當社へも必ず同じく下り給うたといふ。

寶昌寺　曹洞宗で建武二年十月二十二日小田貞宗の開基にて、初め牛渡寺と稱し、後小田孝朝之を再興し、寶昌寺と改む。

佐賀村（汽船發著は志戸崎、有河、田伏）

此村は霞ヶ浦へ突出して居る最東端である。

服部雪堂　田伏の人、父玄仙の後を紹ぎ、稽醫館司簿となり、宮本茶村、齋藤晩晴と共に、水南三哲と稱せられた。安政元年小川鄉校の開かるゝや、頭取に擧げられ、源烈公の信任厚く、屢〻謁見を賜はる。初め公の幕譴を蒙るや、雪寃大いに努めた。後憂國の情禁じ難く、藤田信、竹内延秀等と計畫する所あり、名醫國を醫すと謂ひて匙を投じ、諸士と共に筑波山に據り、筆札を秉り、四方に對應し、後那珂湊に轉戰、更に京師に訴ふる所あらんとしたが、道梗がりて通ぜず、遂に難に斃れた。時に元治元年甲子十月八日、年五十八であつた。



藍見崎

有河川岸　三叉沖に接近して、古來船の避難地とせられてあつた。一瀬川は鰻の名產地で上大津の鶴沼より來り此河岸へ注ぐ。

歩岬　一名藍見崎といふ、大字志戸崎にあつて、斷崖三十米、老松古杉多く、霞ヶ浦の眺望第一と稱せられ、丘上に觀音堂あり、陰曆七月十六日參詣人群集し湖上壯觀を呈す。

素鷲神社　弘仁九年正月三日の創立にて、初め天王山にあつたが、元和五年山麓に遷す、源義公幣帛を賜ひ南領三社の一となす。

大宮神社　大字安食にある。保元元年修築し、元祿十四年義公神體を檢べたところ黄金の佛像なので之を却け、伊勢鹿島兩宮の分靈を祀り神鏡を寄贈した。

竹内百太郎　竹内延秀字は子實、櫺堂と號す。憂國の志深く、兵備金二千五百兩を水藩に献す。烈公幕譴を被るや、憤慨して江戸に上り、同士とその雪寃を議す。後勅書返還阻止に黨し、淺井才助と變名し、壞夷を策して禁錮さるゝこと三年、後宥されたが、更に藤田小四郎と筑波山に義兵を擧ぐ。時に、幕府の大兵下妻に至り、多寶院に陣取るや、延秀卒先して夜襲をなし、奮戰敵を退けて前額に銃創を負ふ。轉じて那珂湊の戰となり、武田耕雲齋等と京都に落ちやうとしたが敦賀に刑せられた、年三十五。明治八年別格官幣社松原神社に合祀。四十年特旨を以つて從四位を追贈せられた。

志士庫村

空也上人墓　字堂上にあり、傍に一老松ありて周圍二丈六尺ありしが、享和三年雷火の爲めに枯る。

關川村

鳳賢寺　大字井關にあり、眞言宗にて元祿二年源義公の命によつて那珂郡額田より寺を移す、不動尊を安置す。

三村

三村城址　常春寺の西北字二條の高丘にあり、天正年間高野常春之に居る。城西の野に十三塚あり、常春の臣十三人の戰死した所だと。

鹿島神社　大同二年の創立で、初め鹿島、香取、息栖の三社を本社に奉す。往時上郷、下郷、新治の三を合して三村の稱が起つた。

常磐線——高濱驛

高濱町（汽船發著す）

戸數六百、人口三千三百餘、汽船發著所及び常磐線高濱驛あり、酒醤油を特産とする。

船塚山古墳　高濱町の中津川と北根本の兩大字に跨る、前方後圓の大古墳で、大正十年三月史蹟に指定せられた。茨城國造初祖の墳墓であらう。

志士祠　東田中松林中に在り。志士服部雪堂・朝日太郎の靈を祀る。元治甲子兩氏殉難の地と傳へられる。もと高崎有志の創立にかゝり、最近篤志家久松大吉氏より新らしい祠が寄進された。

玉川村

古塚　下玉里字高谷光明寺内にある。元祿三年源義公此塚を發き、朽腐した刀劍鎧鏃を掘出した。

瀧平主殿　諱は佳幹、後瀧平太郎と改名す、大字下玉里の人、藤田小四郎に從つて義兵を擧げ、各所に轉戰して越前敦賀に刑せらる、年二十九。松原神社に合祀せられ、後正五位を追贈せらる。

田余村

龜塚　大字上玉里に大小二個連絡して塚がある。大きい方は徑約一二米、高約一五米、小は徑約三米高約六米、兩塚間窪く瓢形で、長三六米餘、古墳たるや疑のない所。

經塚　字松原にある、四個あつて、形狀不同、石岡より小川に至る往還の東側に並列す、相距五五米、之を掘ると必ず寸大の石が出る。一個に一字を書し墨色鮮明である。

栗又石窟　字石窟の畑中にあり、高三米、下に石窟あり、内外二部にて高約二米幅約一米、厚一五糎ばかり、層石を以て左右の壁とす、更に石にて上部を覆ふ、入れば長方形であると。

圓妙寺　大字上玉里にあり。天台宗で、至德三年二月江州三井寺法印乘憲の開基に係り、智證大師が血を刺して書いた所の血不動の眞幅を藏すといふ。

常磐線——石岡驛

石岡町

往古國分寺を建立せられし有名の地で、古へ平村と稱し、國府を置きたるを以て府中とも呼んだ。明治二年石岡と稱す。將門の亂に國廳寺院悉く烏有となつた。戸數三千四百、人口一萬八千餘。縣立農學校、町立實科高等女學校等がある。

物産　酒、醬油、米麥、生絲、繭の産地にて、京阪地方に輸出する年額尠くない。

府中城　石岡城とも稱す、平詮國の築く所にて、天正十八年に至り佐竹氏の爲に滅さる。元祿十三年には松平播摩守之を修し、松平賴策に至りて明治維新となる。

大掾氏歷代墓　字富田平福寺内にあり、平詮國以下九世の墓にて國香の墓ではない。

波止石　大字染谷字上石倉にあり。高七米、幅二米、頂上國常立尊を祀る。太古波濤常に此に激したりと傳へられて居る。

總社神社　字宮下にあり、六社を合祀す。初め大據平詮國築城の後、國中の式社に對する遙拜所として建てしもの、古文書其他寶物三十七種ある。

國分寺　大字國分にあり、聖武天皇九年の創立で、桓武天皇の勅願所である。新義眞言派にて淨瑠璃山と號す。本尊藥師は行基作にて、仁王門は寶曆年間の再建に係る。金剛力士は春日作、梵鐘其他寶物數種ありしが、明治四十一年四月二十二日類燒して昔日の美觀は全くない。

國分尼寺址　尼寺ヶ原にあり、伽藍の跡歷然として存せしも、近年耕地となつた。國分寺址及尼寺址は共に大正十年十月史蹟に指定された。

清涼寺　曹洞宗にて、興國山と號す。文祿元年十月佐竹義尙の開基である。

花園寺　時宗常榮山と號す。一遍上人の年譜に云ふ、弘安四年春修行、常陸國これ遊行の本國に至りし始なりと。其他寺院少なからず、小田氏、佐竹氏時代武人の宗敎熱盛なりしを知るべきである。

熊岡美彥氏　此町出身の洋畫家で、數回帝展に入選し、一躍して特選となり、又推薦となる。

新　治　村

中根長者屋敷址　大字下土田字中根にあり、高二二米面積十町歩許、周圍に空濠がある。

神社　大字野寺に胎安神社あり、大字新治には二荒神社があり、前者には頼義東征途上の傳說があり、後者には日本武尊東征途上の傳說がある。

志　筑　村

閑居山　高さ七八町、弘法大師駐錫の靈場にて、滿山古松綠濃き間を行く數百米、十一面觀音を安置す。建築の地勢奇觀、藤の瀧もあり、山頂の展望頗る可い。

梅が枝の花の垂冰も岩そゝぐ雫の下に消ゆる白雪　（後九條院）

田井の名水　繼瀨川を隔てゝ權現山から、龍神山に跨る水田中の竹叢の裏にある、明鏡に似て淸冷透徹、武藝槌命曾てこの靈泉を掬したと傳ふ。

わびしよに雁もなくなり尾花ちる雫の田井に月のてる夜を　（好文）

四萬騎原　志筑から南二里佐谷にある八幡太郎が兵を勒した所といはれて居る。

柿　岡　盆　地

柿岡盆地は山根地方ともいふ。新治郡の北部に位し、石岡町の西北に當つて居る。西は筑波の高峰及び其れから北に走る山脈と南東に延びた山脈とに塞がれ北は加波山、吾國山脈を繞らし、其中に盆地をな

した、一町七ケ村である。地質學上火成岩、水成岩露出の接觸地點として、或は其他の礦物研究地としては、全國中秩父山系と此盆地が最も大切な所とせられしある。農產は米、煙草、柑橘類を最とし、促蔬成菜も近來大に發達した。盆地の中心をなす所が柿岡町である。

柿岡町

柿岡へは、石岡驛から一一、一粁、乘合自動車がある。戸數五百餘、人口三千八百を越ゆ。**中央氣象臺柿岡地磁氣觀測所**がある。

柿岡城址　柿岡字館にあり、文永八年八田知家の八子時家始めて此に居り小田氏と稱す。

高友古墳　字高友丸山の頂にあり、高一二米、方二二米、二重の濠壘で圍み、東方三六米にしてまた古墳がある。往古山陵の築造に髣髴して居る。前方後圓、東西三六米、南北三三米、高六米、中間に凹處あり、數年前發掘して見たところ石棺があり、土器、鏡、玉、刀劍の類も出でたと。

如來寺　大字柿岡にあり、建保二年三月、親鸞上人霞ケ浦を渡り、稻敷郡木原に一寺を營んだのを、長享元年此地にありし天台宗の如來寺と交換したものである。

小幡村

小幡城址　大字小幡にあり。

十三塚　大字小幡より筑波山麓に接したる所にあり、昔時佛道に歸依して死者の冥福を祈る爲め、初七日より十三年忌迄に經文を書寫して、忌日毎に一基を作つたものだと。

白鳥神社　大字小幡にあり、元和四年再建の棟札が有る。天正年中の鄕社にて小田氏神殿を造營したことがある。

實藏寺　眞言宗にて鹿遊山と號す、坂東二十二番の札所で、昔北條時賴最明寺と稱して諸國歷遊の途此寺に滯留し、其笈と持佛の行基作子安地藏尊とを寺に遺し今に存すといふことである。

葦穗村

葦穗山　海拔六二七・五米。孤峰危岩重壘し、頂上足尾神社を祀る、眺望は絕佳である。

上曾城址　葦穗の山脈東走して一峰をなす所にあり、東西南の三面は懸崖數十丈、北方空濠を存す、小田朝俊此に據り、天正年間佐竹氏の爲に滅さる。

峰寺の吊堂　天台宗なり、大同二年德一和尙山麓を過ぎ、大師の像を拾ひ此堂を建てて安置すと、懸崖の中腹に建築せられて奇觀を呈して居る。

板敷山　大字大增の北部にある。昔此山に住みし山臥辨圓なるもの、親鸞の教化盛んなるを憎み、山下にこれを要擊せんとすること屢々なれども、いつも目的を達せず、遂に稻田の禪房に至りて之を害せんとしたが、親鸞を見て害心忽ち消滅し、泣て其弟子となる。辨圓が當時親鸞を呪ひし護摩壇今尙存す。

山も山みちも昔にかはらねどかはりはてたる我心哉

こいふ辨圓の歌がある。板敷山は西に折れて加波山となり、南に延びては筑波山となる。東は吾國山に續き、景狀最も雄偉である。

加波山　海拔七〇九米。眞壁新治の二郡に跨り、鄕社加波山神社を祀る。南部は危岩多く、行導者の外至るもの稀で、俗に之を禪定場と稱する。滿山樹木多く、眺望よく、夏時禪定と稱して登山する者多い。信仰としても精神修養としても好適地であらう。明治の初期頃、立憲政治促進の爲め、富松正安外數名が急激運動を此山に企てたことがあつた。

大覺寺　大字大增にあり、眞宗大谷派にて板敷山と號す、承久三年大覺此地に阿彌堂を創立し大覺寺と稱す、文明年中亂に遭ひ廢絕したのを、寶曆年中再建し、正行寺と改稱した。

瓦會村

兜塚　大字瓦谷小松惣兵衞宅地內にある。先年發掘したゝ、人骨、玉、刀劍等を出したが、坪井博士の鑑定によると千四百年以前のものであると。

雲照寺　大字瓦谷にあり、眞言宗常明山と號す。慶長九年小松盛光の開基に係る。

林村

山縣大貳首塚　大字根古屋、泰寧寺內にある。桃園天皇の御宇竹內式部といふもの京都に居り、學を公卿に授け、頻りに大義名分を說き、幕府を罵り勤王の思想を唱ふ。天皇亦召して其說を聽かんとし給うたが、寶曆八年幕府これに關與せし公卿を罪し、式部を放逐した。其後式部の友人藤井右門、山縣大貳亦尊王を說き、兵法を講ず。明和四年幕府之を不敬として重刑に處す。時に本村出身園部文之進なるもの江戸に在り、熱き大貳の學徒なれば、其の首を小塚原の獄門臺より奪ひ來りて竊かに此處に埋めたと。

佐久良東雄　文化八年三月二十一日、大字浦須に生る。僧庚哉の徒弟となり、九歲にして良哉と改名

し、天保六年眞鍋善應寺の住職となる。時に年二十五。好學にして國史を研究し、大義名分を知悉するに至り名を東雄と改む。天保の飢饉には藏書を賣りて施與し、藩主の賞を被る。或日藤田東湖來りて水藩に仕へん事を勸む、答へて曰く我れ　天皇に仕へんのみと。天保十一年慨然として佛門を去り、鹿島神宮に詣で、御手洗池に水垢離し、七日間の斷食をなして王政の復政を祈つた。後京都に上り、白川宮に皇典を講じ、神祇道學師を拜命す。萬延元年三月櫻田の變起り、其主謀者高橋多一郎を陰匿せる廉により拘禁せられ、四月江戸傳馬町の獄に繫がる。東雄周の粟を食はずこし絶食して死す、行年五十。明治に至り大阪府東成郡阿部野へ改葬す。法名眞道居士、明治二十四年靖國神社に合祀せられ、次て從四位を追贈せられた。

園部村

御野立所址　大字眞家、字長原の原野内にあり、明治二十三年　明治天皇近衞機動大演習を天覽あらせられ、觀兵式擧行の際御野立所を此地に設けられた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

筑波郡

概說

沿革　古の筑波國は、筑波山以南小貝川と霞ケ浦とに夾まれた地域を含み、可なり廣いものであつたが、大化改新の後、河内・信太二郡を分ち、筑波郡は主として櫻川流域の沃野を中心とするものとなつた。其後郡域に變遷があつて、今の本郡は舊筑波郡の東部を新治郡に割き、舊河内郡の大部を併せたものである。鎌倉時代以後小田氏勢力を振ひ、結城・佐竹等の諸氏と爭うたが、天正年代終に東部は佐竹氏に西部は多賀谷氏に併せられて沒落した。江戸時代には細川氏が谷田部に陣屋を置いて附近を領した外は、大部分幕領であつた。明治以後は新治縣に屬し、後茨城縣に合せられた。谷田部町は今日尙郡の首腦地たるを失はない。

地勢・戸口　北は眞壁郡、東は新治・稻敷兩郡、南及西は小貝川を隔てゝ北相馬及結城の各郡に對し、筑波山並に其連嶺は東北隅に聳えて居る。地形上大體四部に分れ、東北隅の山地、櫻川流域地、中部の高原地帶小貝川流域の低地と順次に續く。最後の部分は寛永年中伊奈平十郎の小貝川及鬼怒川改修に依

て干拓せられた所で、美田に富む。面積約三二六方粁、戸數一萬四千六百餘、人口八萬三千三百餘、之を三町二十四ヶ村に區劃する。

教育　小學校は尋常校一〇、併置校二六あり、實業補習學校三七、青年訓練所二九を算へる。郡教育會は谷田部町自治會館内に置き、北部（北條）・西部（吉沼）・中部（小野川）・南部（小張）の四部會がある。

交通　鐵道は僅に郡の東北隅の筑波山麓を繞つて布設せられ他は自動車による。本郡の主要自動車線は土浦・谷田部・水海道間、土浦・大穂・北條間、下妻・北條並筑波間、高道祖・三妻間、大穂・谷田部間、谷田部・守谷間及谷田部・取手間、水海道・豊・藤代間等で郡内の主要部を連ねて居る。

物産　筑波の蜜柑、北條の米、谷原の繻は主要なるもので、其他大麥・大豆・繭・林産等がある。

案内順序　先づ筑波線沿道、次に筑波から下妻街道を西に、更に南折して小貝川沿岸を南下し、南端から臺地を山に引返して大體一巡する。

筑波線――小田驛

小田村

小田城址　小田驛の東南五五〇米の地にあり、遺壘廢墟今猶昔を偲ぶものがある。城は八田知家の築く所、延元三年北畠親房卿、義良親王を奉じて東奥を鎭するに當り、偶〻海上颶風に遭うて、諸船相失ひ、卿は常陸東條浦に漂著した。當時小田治久小田城に在つて義を唱へ、親房を迎へた。興國二年興良親王亦本城に入らせらるゝに及んで官軍大に振ひ賊軍を擊退したが、高師冬の大擧再來するに當り、治久欵を賊に通したれば、親房は逃れて關城に走つた。親房の當城に留ること四年、矢石の間に筆を執つて職原抄並に神皇正統記を著した。三島毅の撰する小田城墟の碑銘に、

波山之南　霞浦之北　斯表舊墟　豊碑深刻　孤軍桿賊　威震八州
鉅筆垂法　文昭千秋　山乎雖頽　遺勳曷沒　湖乎雖乾　餘澤曷竭

寶筐山　小田村の背後に聳え立つ、海拔四百六十二米突。山頂に寶筐印塔がある。眺望の佳絶筑波に次ぐ。

極樂寺址　寶筐山南麓一帶の地を『尼寺入り』と云ふ。三村山清涼院極樂寺の址である。寺は八田知家の建立に成り、小田家累代墳墓の地であつた。小田城殁落の時兵燹に罹り堂塔一切烏有に歸してしまつたが、當時の洪鐘は今猶土浦町等覺寺にある。

北條町

多氣城址　町の直後に自然の大屏風を立てたる如く聳ゆる山は、俗に城山といひ、多氣城の舊址である。城は長德中大掾國香の孫維幹の築く所である。維幹五代の孫義幹常陸大掾となり、關東八將の一に數へられ威望遠近に振つた。爲に小田城主八田知家の忌む所となり、事を構へて讒訴せられ、結果其采邑は沒收せられた。時に建久四年。

義幹の墓　城山の南麓郊外の小丘不老臺に在る。墓は五輪石塔で高二・三米、基石方一米、其表面に『多氣太郎義幹無量院殿阿彌陀佛』と刻し、側に『建久四年癸丑七月十五日卒云々』とある。

浦堀　多氣義幹の開鑿に成る。偶〻源頼朝富士巻狩の擧あり、八州の將士何れも其擧に參じたが、獨り義幹開鑿の工半なる爲上意に添ふことが出來なかつた。時に曾我兄弟仇討の事を誤傳へ、頼朝難に遭ふこし、常陸地方の人心動搖した。小田城主八田知家、日頃多氣氏の威望を忌み、此機を捉へて義幹塹濠を深くして不羈を圖ると讒訴した。多氣氏は爲に寃罪を蒙つて滅亡に歸したが、浦堀川水は表北條の大動脈となり灌漑の利今に大なるものがある。

慶龍寺　俗に泉の觀音といふ。大字泉に在り、北條驛を西に去る一粁餘。本尊は大同二年弘法大師洛陽東寺に於て彫刻したものと傳ふ。後六百年、後土御門天皇文明四年、御室仁和寺の隨弟法師東寺より此尊像を拜請し、日本廻國の途に上り、相州小田原に止まり一宇を開き觀音寺と號した。降つて元和四年觀音寺の僧慶龍法師、復尊像を笈に納めて廻國し、終に當地に草庵を結び堂宇を建て、慶龍寺といつた。境内櫻樹多く花の候殊に參拜者が多い。

田井村

飯名神社　大字臼井飯名岡にあり倉稻魂命を祭る。創建の年代詳でないが、萬葉集常陸國歌に

つくば根に雪かも降らる飯名岡もかなしきころがにぬほさるかも

とあり、又風土記信太郡の一節に『其里の西飯名社、此卽ち筑波岳に有る飯名神の別屬なり』とある。風土記以前の創建であることが知られる。

靈影神社　神郡字豊浦にあり、稚產靈命外二神を祭る。延長四年九月國造權太夫良平の創建と稱せらる。養蠶家の崇敬頗る厚く、遠近よりの參拜鮮くない。萬葉集に

つくば根の新桑眉の衣はあれと君がみけしはあやにきまほし

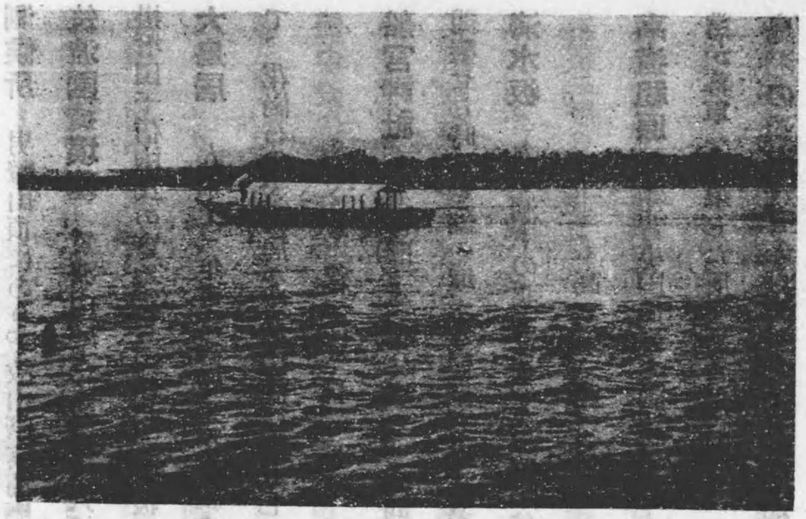
常陸なるたてたてぬに織る糸は筑波の山の錦なりけり　などある。

六所神社　蠶影山の北方にあり、筑波山神二座と、攝社四社を合祀せるにより六所の名がある。之はもと筑波山神の遙拜殿で、御座代祭も此所で行はれたものである。延暦中、坂上田村麿東征の途次、馬具・寶劒・神鏡を納めて凱旋を奉告したといふ。又鳥居の裏面に『征夷大將軍坂上田村麿建之』と刻せられたのが、現に同社の寶庫に祕藏してあると云ふ人もある。去る明治四十三年維持至難を名として蠶影神社に併祀し社を其處に移した。

筑波線――筑波驛

筑波町

筑波山　本縣の名勝として東に大洗の怒濤あり、北に袋田の瀑布あり、南に大江利根を擧ぐる時、西に、筑波の秀嶺は蓋し名勝中の第一であらう。白瀧の幽邃、辨慶七戻の奇巖、峰より落つる男女川、神代ながらの高天原等の名所もさることながら、そゝり立つ海拔九百米の頂上に立つて、關八州を一眸の下に見渡す雄大さ、近年筑波鐵道は開け、登山ケーブルカーも通じて、古の『にひばりつくば』は今や東日本隨一の景勝として廣く世人を招いて居る。國立公園の豫選に入れるも偶然ではない。



霞ヶ浦より筑波山遠望

つくばねのよそのみ見つゝありかねて
雲のゆき道をなつみけるかも（萬葉集）

筑波山神社　筑波の山腹二百八十米突の高所に在る。創建年代及び祭神詳でない。桓武天皇延暦元年僧德一本地垂跡の說を立て諸册二神を祀ることゝした。明治六年縣社に列せられた。社殿丹青の美、境內老杉の綠と相映じて雅趣掬すべきものがある。社寶吉宗拵絲卷太刀は國寶である。

依雲亭　男體女體兩峰の縫合點に二軒の茶亭がある。昔は五軒あつたので五軒茶屋と呼ぶ。此處に『依雲亭』の三字を刻せる扁額がある。水藩の志士藤田小四郎が刀の小柄を執つて自ら彫刻したものである。往年沿海には英米の船艦出沒して頻に開港を迫まるの秋、奮然尊攘の義旗を此筑波山上に飜した時の好個の記念品である。

測候所　男體山頂にあり。故山階宮菊麿王殿下の御經營に成る我國高山觀測所の嚆矢である。

筑波國造墳墓　筑波山麓大字沼田に八幡塚と稱する古墳がある。大正二年縣囑託栗田勤、宮内省御用掛増田干信兩氏の實地調査の結果、筑波國造の古墳であることが斷定された。

大鳥居　大正十三年東宮御慶事を奉祝する記念として、全縣下の小學兒童より一錢づつの醵金をなして、花崗石の大鳥居を筑波山麓に建立した。

菅間村

船宮神社　上菅間字船宮に在る。大同四年の創建で中筒男命外三神を合祀する。傳云ふ昔里人此地を開墾せし時、丈餘の埋木を發掘した。其像恰も船の如く之を奇異として一小祠を建立したものである。

清水坂　大字洞下の北方にある坂路の傍、清水滾々として湧出してゐる。眺望絶佳の地である。

高道祖村

高道祖原　往昔小田氏の古戰場として知られ、又元治甲子の役筑波山上に籠れる藤田小四郎等の攘夷黨が幕軍を邀擊した所である。

鳥羽の淡海址　本村の西北より眞壁郡上野村及び鳥羽、黑子、騰波江、大寶に亙る卑濕の地は古の鳥羽の淡海である。北より南に流るゝ一條の水路は、昔の名殘を留むるものがある。

田水山村

日枝神社　鄕社にして大山祇命を祀る。近江坂本山王の分靈で、承久三年の創建になる。往昔田中庄三十三鄕の總社で、一の鳥居は本郡南部の豊村に、二の鳥居は中部の島名村に、三の鳥居は大穗村にあるといふ。古文書を多く藏する。

莊司館址　大字田中字坪内にある。西北に殿内堀と呼ぶ壍濠の址がある。田中莊司累世の館址で、字内の殿内及び後庵は其別邸の在つた所と傳ふ。

田中氏の墓　大字田中堂の下に四基の五輪石塔がある。田中莊司四世の墓である。八田知家の九子九郎左衞門尉知氏始めて田中の地頭となり、田中氏と稱した。二世知維、三世時綱、四世宗繼相次で地頭となり、五世の孫三郎隆繼に至り、高師直に黨して終に滅亡した。

引松　田中字引松にある。傳說に承久三年日枝神社創建の際、近江國唐崎松の實生を移植したので引松の名がある。又一葉なれば一葉松ともいふ。或人の歌に

筑波根の常磐に榮ゆ一葉松いく十返りの花や咲きけん

數百年の星霜を經たる喬木も、明治十三年の暴風に吹き折られて今は其の分種一株を殘すのみ。

水守城址　下妻街道を西に行けば、弓手の岡に老樹鬱蒼たる一叢がある、卽ち水守城址で、櫻川を挾んで北條多氣城と對峙したものである。將門記に水守營とあるのは此處の事で、後貞盛の養子平維幹此處に築きて水守大夫と稱した。

上郷村

長峰城址　大字上原春日神社の北方にあり、常總鐵道石下驛より四粁。文明十一年豐田四郎平治基の叔父、長峰將監正次の築城で、小貝川を俯瞰する要害の地である。

金村臺　三妻驛より四粁、大字金村にある。天正元年下妻城主多賀谷氏が豐田氏を攻めた時、小田氏治豐田治親を援けて奮戰した古戰場である。今猶田圃の間古器物を發掘することがある。

別雷神社　小貝川の東岸金村臺下約五五〇米にある。領主豐田氏が靈夢に感じて西京加茂別雷神の分靈を勸請したものである。社格は鄕社、境内に竹垣代官の碑がある。

竹垣君德政之碑　竹垣翁諱は直溫、字は叔恭、三右衞門と云つた。寛保元年江戸小川町に生れ、後郡官として北越及び攝河播三州に莅み、治績大に見るべきものがあつた。寛政五年徵されて江戸に歸り、更に房總常毛の四州の郡官となり、殊に本國筑波及び野州芳賀の二郡に在つて、殖産の道を講じ興業の法を勸め仁政を施した。本村大字角田に其陣屋の址がある。碑文の一節に『民愛服者猶子之於父母』とあるあを見ても、如何に郡民に愛敬せられたかゞ窺はれる。

眞瀨村

船繋松　大字眞瀨字中津の田圃の一隅に一小丘あり、丘上に一大老松が蟠屈してゐる。往古此邊一帶渺漠たる大湖をなし、遠く牛久沼に連なつたもので、多賀谷勢が岡見、栗林の諸城を攻むる時、戰艅を此松に繋いだために此名を得たといふ。

高須山永興寺　十一面觀音を安置する。天台宗の僧名室傳宗和尙の開山で、初め字高城寺に堂宇を建立したが、其地が鬼門に當る爲め成就せず、中古殆ど荒廢に歸したが、後高須山に移して堂宇を再建し、曹洞宗に更めて以來、三百七十餘年法燈常に輝いてゐる。

福岡村

福岡堰　關東三大堰の第一と稱せらる。本村地先、北方眞瀨村境の近くにある。三百年前代官伊奈半十郎が起工したもので、谷原領其他四千二百町歩に灌漑してゐる。從來木造であつたのを、大正十年よ

り三年間に亙つて大工事を起し、現在の鐵筋混凝土に改築した。實に工費十五萬圓を投じたもので、地方稀れに觀る偉觀である。

十和村

谷原糯　一名太郎兵衞糯ともいふ。代官伊奈半十郎谷原領開墾の際、武藏國越ヶ谷より良種を齎らして試作せしものである。初め十和地方に栽培したが、年を經るに從つて谷原領一帶の地に栽培せらるるに至つた。谷原糯の名已に安政年間江戸神田市場を壓したることあり、更に明治初年東京正米品評會に於て、優等賞を得て、一層聲價を高むるに至つた。

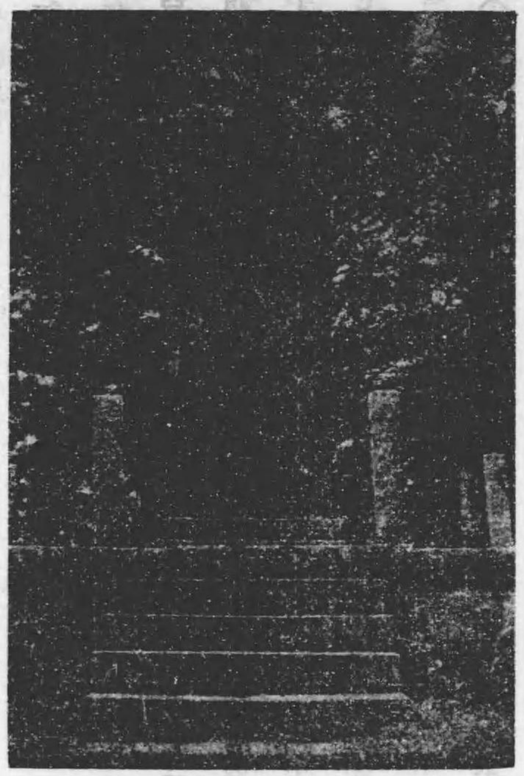
華藏院　天台宗の古刹で大字田にある。維新前の朱印地十五石、本尊阿彌陀佛は僧惠心の作といふ。檀家は福岡十和の十大字に跨つて五百戸を有してをる。

長崎村

聖德寺　聖德太子の開山と傳ふ。天慶年間將門反逆を企てた時、諸寺に勅して調伏せしめられたが、當寺も亦其一である。降つて貞永壬辰の歲親鸞上人關東教化の際、太子建立の靈地なるの故に、當寺に滯錫せられたこと一百日、後多賀谷氏の兵亂に堂宇烏有に歸したが再建成り、慶應二年再度の火災に堂宇また燒失した。今の本堂は明治四十年の建築である。

鹿島村

鐵火松　大字楢戸に鹿島神社がある。古來世俗の尊信厚く、殊に慶長三年二月大房藤十郎檢地の時、今の長崎の地に於て、常總の國境に付いて爭論起りしため、神裁を鹿島神社に仰ぐことゝした。湯釜祭を行ひ決裁の結果は楢戸の勝利となり、之を記念する爲松を植ゑて鐵火松と呼んだ。蓋し双方の代表者灼熱せる鐵棒を握ると否とに據つて曲直を判じたからである。



間宮林藏先生の墓

谷井田村

間宮林藏墓　近世の一奇傑間宮林藏の墓は大字上平柳專稱寺に在る。縣道より西南約三粁。林藏字は

倫理、天資穎敏算數の理に長じ、幼時嬉戯するに竹竿を以て樹木の長短、河流の深淺等を測るを樂みにしたといふ。文化年中幕命を奉じて單身樺太探檢の壯圖に出たことは世上皆之を知る所、當主正倫氏は之の養孫である。

久賀村

貝塚　東栗山と隣村大字神生の接する邊に在り、古代住民の遺物を多く發見する。上古此地方は霞ケ浦・牛久・印旛・手賀の沼湖皆連接した所で、利根・小貝の諸川の下流は、即ち湖心の殘れるものである。牛久沼に臨めるこの貝塚は上古の大湖畔にありて、遠くは銚子附近の余山貝塚、近くは稻敷郡の諸貝塚との間に來往ありしものなりといふ。人類考古學上の實驗地として有名である

板橋村

不動院　大同年中弘法大師東北教化の際錫を此地に留め、不動明王竝に兩童子を彫刻して、婦女子の爲に求子安產を祈念せられたものと傳ふ。大字原新田御聖塚は其遺蹟で、二間四面の小堂宇であつたのを、中興の住持祥海阿闍梨が、康曆年中七堂伽藍を建立して頗る輪奐の美を極めたが、嘉吉三年及天正年間再度の兵火に罹つて荒廢に歸した。其後更に文祿年中高僧靈雲阿闍梨、領主信徒と相謀り聖域を現在の地に移し佛堂を建立した。現存の本堂及び樓門はそれである。不動明王及二童子は國寶に指定された。

岡田君功德碑　不動院本堂の北側にある。岡田寒泉は幕府の小普請及西丸書院番を勤められた、善富の第二子で、元文五年十一月生る。性明朗俊邁、才文武を兼ね、傍ら醫學に通じ、和歌を善くしたといふ。寛政六年代官に任ぜられ、筑波外六郡を管する事となつた。風俗を正し荒蕪を開き、貯蓄を勸め、生兒哺育の費を給して人口の增殖を圖つた。蓋し竹垣、伊奈兩代官と共に本郡開發の大恩人である。

小張村

小張城址　大字小張城山にあり、俗に御殿址といふ。天正年中小田氏の臣只越全久の居城であつたが、仝十四年多賀谷重經の陷る所となり、後松下重綱の居城となつて、元和二年下野に遷るに及んで城は遂に廢せられた。

谷田部町

中村勸農衛　竹垣、伊奈、岡田三代官と共に地方開發の恩人として其功績の滅すべからざる者に中村勸農衛がある。茂木（谷田部）藩士にして細川侯に重用せられ、二宮尊德の報德教を奉じて荒廢復興に

盡瘁された。殊に『さゝし草』を著はし、嬰兒壓殺の罪惡を諷したる繪と共に之を各戸に配布し、以て墮胎の惡風を戒めた。

谷田部城址　小田氏の臣岡見主殿の居城であつた。元亀元年下妻多賀谷政經之を陷れて弟經伯を居らしめたが、天正八年北條氏照等の攻むる所となり、經伯父子は戰歿した。重經大に怒り一擧之を復した。慶長以後茂木細川氏の領有に歸して。明治維新に及んでゐる。今の自治會館は當時の陣屋址である。

島　名　村

石川唯一氏　明治三十七年修業年限二ヶ年の補習學校を創立した事がある。氏頗る考古學に趣味を有し、地方に貯金組合を設けて好成績を擧げた。傍ら郡内石器時代の遺物蒐集に努め考古館まで設けた。

葛　城　村

大白硲　東西相竝んで大小白硲（ハザマ）の二大字がある。佐々木高綱の裔大和田大膳亮が開墾せる所と傳ふ。大膳亮嘗て鎌倉に住したが、戰亂を遁れて此地に來り、大小を投じて歸農土著した。當時の館址大和田山に在り、鎭守鹿島神社は元大和田氏の氏神であつた。

小　野　川　村

高層氣象臺　大字館野に在り。常磐線荒川沖驛より六粁、土浦驛より一〇粁、土浦よりは自動車の來往あり、僅に廿五六分にて達する。海拔僅に二十五米突の岡阜であるが、長峰の稱呼もある如く、自ら高原の狀をなして、高層氣流の觀測に便するものがある。

旭　村

辨財天　大字酒丸に在り、其構造三出先造にして、彫刻精緻を盡し、雅致群を拔く。蓋し五六百年前の建築ならんといふ。堂宇の周圍には池水を圍らし、石垣を壘み、石造の反り橋にも巧妙なる彫刻を施してある。近年專門家の鑑定により、數奇者の注目する處となつた。

聖林寺　醫王山と呼ぶ。眞言宗普門寺の末寺である。天文八年僧叡宗の開基で朱印地五石とある。延享元年祝融子の見舞ふ所となつたが、同二年再建せられて本堂樓門等現存してゐる。筑波の變殘徒此樓上に隱れたが、土浦藩の爲に全部斬殺されたとの事。

大　穗　村

一ノ矢天王　小田驛から西へ約四粁、陰曆六月七日例祭、參詣者雲集して殷賑を極める。

若森城址　元亀元年下妻城主多賀谷政經、東方小田氏の所領を攻略し、此地に城づいて部將白井對島

守をして守護せしめた。北は北條小田を壓し、南は谷田部城を手に入れて、多賀谷氏の勢力は一時全郡を壓したものである。今の館山は當時の城蹟で、土壘塹濠昔を偲ぶものがある。近世旗本堀田土佐守正之此處に陣屋を置き、其男讃岐守正高に及んでゐる。明治初年若森縣廳を此地に置かれた。

眞壁郡

概說

沿革 本郡は古新治國造の所管に屬し、大化改新の際新治郡となり、後郡の一部を割いて白壁郡を置き、平安朝の初之を眞壁郡と改めた。中世以降庄園起つて新治の郡域は四分五裂し、笠間・中郡・伊佐・關等の諸庄に別れて郡名を失ひ、眞壁だけは其儘保存せられたので、文祿の際伊佐・關を眞壁に併せて一郡を立てたものである。吉野朝に關宗祐・下妻政泰等、關館・大寶二城に據つて高師冬等の賊軍と勇戰したのは最も名高い。本郡は小田・結城兩雄の間に介在し、應仁以後爭奪の巷となり、眞壁（眞壁）・多賀谷（下妻）・水谷（下館）等の諸氏雄を競うた。江戸時代になつて淺野（眞壁）・石川（下館）・井上（下妻）等の諸藩があつた。而して以上の三ケ所は現在に於ても尙郡の首腦地として鼎足の形をなして居る。

地勢・戸口 常陸の西端を占め、東は筑波山脈に依つて新治・西茨城兩郡に堺し、北は國境の山地によつて栃木縣の芳賀・下都賀兩郡に接し、西及西南は鬼怒川及舊河床に依つて下總の結城郡に包まれ、南は筑波郡に連る。內に櫻・小貝・鬼怒の三川が相竝んで南北に貫流し、三大縱谷をなし、各の間に臺地を夾む。小貝流域南寄り一帶の低地は、風土記竝に萬葉集などに見える騰波之江の址である。郡の面積約三八四方粁、戸數二萬二千餘、人口十二萬三千八百餘を有し、四町二十七ケ村に區劃する。

教育 小學校は尋常校一、併置校三一あり、實業補習學校は三一、青年訓練所三三、其他の學校には縣立下妻中學校・同下館高等女學校・同下館商業學校・同眞壁農學校・組合立下妻實科高等女學校等あり、教育の機關はよく整うて居る。郡教育會は事務所を下館校に置き、下館・上妻・大・眞壁の四部會がある。

交通 鐵道は水戸線郡の北部を東西に貫き、眞岡線及常總線共に下館驛から分岐して南北に貫き、常總線太田鄕驛から支線を關本に出して鬼怒川岸に達し、更に水戸線岩瀨驛から、筑波線が南に分岐し、

筑波連山の麓に沿うて南下するから、鐵道の便は縣内第一といへる。乘合自動車線亦よく普及し、下館・下妻・眞壁三ヶ所を中心として相互間は勿論、眞岡・岩瀬・北條・古河・結城等を縱横に連絡して自動車網をなして居る。

物産　主要物産は米・麥・大豆・繭絲・梨・桃・甘薯・葉煙草・絹織物・石材・土管・清酒・醬油・麥粉・足袋底・木綿等で、就中下館を中心とする足袋底、關本・上妻・川西・大寶各村の梨、大國・雨引・長讃各村及眞壁町附近の葉煙草、五所・伊讃・太田・各村の絹織物（所謂結城紬）樺穗・雨引・眞壁附近の花崗石下館附近の經木眞田、眞壁・柴尾地方の製粉等は特に有名である。

案内順序　先づ水戸線沿道を西から東へ、次に筑波線沿道を北から南へ、最後に常總線沿道を南から北へ進めば、本郡は完全に一巡が出來る。

水戸線――川島驛

鬼怒川　川島驛より西へ一〇〇米、北より南に奔流す。毛野川或は衣川、又は絹川に作る。下野國鹽谷郡衣沼山衣沼に源を發し、東南に流れ、本縣に入つて先づ結城郡・眞壁郡の境界をなし、次で結城郡を南流して北相馬郡に入り、遂に利根川に合流す。舟楫の便、漁獲の利尠からず、上流には鮎の產多く、下流には秋期生鮭の漁獲が多い。東南風には增水甚しけれども亦減水も速い。

伊讃美ヶ原　驛より東北へ約數百米、眞壁郡伊讃村の西端にある大原野である。明治四十年日露戰役後第一回の特別大演習を擧行された時、その觀兵式場となつた所である。それまでは飯島ヶ原と稱せられてゐたが、仝年十一月十八日　明治天皇陛下より伊讃美ヶ原と名を賜はり、即日官報を以て宣布された。伊讃美は勇に通ずるといふ所からの御命名と拜承してゐる。今その中央に行幸記念碑を建てて、長くこの光榮を感謝してゐる。汽車に乘りて川島驛を東すれば忽ちにして北方にその碑を望むことが出來る。

伊讃美ヶ原耕地整理　本の伊讃ヶ原を開墾して三百四十餘町歩の水田を作つたものである。

下館驛

下館町　本縣西部の都會で、戸數二千四百餘、人口一萬二千餘。明治二十一年水戸線の開通と共に下館驛を設けられ、ついで、北に眞岡線を分岐し、更に南は常總鐵道（取手で常磐線に接續する）の起點となつて、ここに鐵道は十字に交叉することゝなり、この他水戸街道・東京街道・取手街道・銚子街道・眞壁街道・眞岡街道等の道路四通八達し、名實共に縣西に於ける交通・運輸・商業の中心地となつてゐる。

從つて商業、工業は日を追うて隆盛に赴き、足袋底、製油、經木眞田、清酒、製糸等の產多く、取引亦活潑にして縣西は勿論遠く栃木の東部までをもその販路としてゐる。縣立高等女學校・同商業學校・縣是製糸株式會社等がある。現在の高等女學校の地は、明治四十年陸軍特別大演習の際大宴會場となりて、明治大帝の臨幸された靈地である。今校庭の中央にその記念碑が建てられてある。

軍神仁平中佐の墓　下館驛より東北に去る八粁餘、河間村大字下高田にあり、中佐名は宣旬、陸軍歩兵中佐從六位勳四等功三級である。中佐の日露戰役に於ける偉勳は仁平山の名と共に永久に殘り、海に於ける軍神廣瀨中佐に對して陸に於ける軍神仁平中佐と稱せられた。今祠を建てて仁平神社と稱してその英靈を祀る。傍に陸軍大將男爵西寛次郎閣下撰文の陸軍歩兵中佐仁平君碑あり、以て英名偉勳を千古に垂る。

中館觀音寺　下館驛を去る北に二・二粁、中村大字中館にあり。天台宗の古刹である。本尊は阿彌陀如來で、延喜元年藤原中納言高房卿、時平の讒に會ひ常陸國伊佐庄に流刑され當時、寺に歸依し守本尊とされた。後秀宗・宗村を經て朝宗に至り、祖先高房の守本尊及累代主將の亡靈菩提の爲に本堂を造營す、時に承元二年である。之を當寺の開基とする。本堂の南數町に觀音堂がある。四民の信仰厚くその像は今國寶に指定されてある。

新　治　驛

小栗判官の墓　新治村大字井出海老澤太陽寺址にある。驛を北に去ること約四粁餘で、寺内に花崗石九層の大塔が立つてゐる。碑面の文字は剝落して見ることが出來ないが、小栗判官滿重の墓であると傳へられてゐる。周圍に小碑が十基ある。これは十人殿原の碑である。太陽寺は今歸農して舊址に住み舊寶物を藏してゐる。滿重の位牌には、

天照院殿前金井太陽宗元源大居士

應永三十三年三月十六日卒

と記されてある。尙小栗判官代助重の遺物として、鬼鹿毛の鐵轡及守本尊と稱する彌陀八幡一體、（丈二寸八分古銅の立像で兜佛の如し）と照手姫の持佛と傳へる正觀音（木像丈一尺一寸）一體などがある。

大國玉神社　大國村字大國玉にある。驛を東に距る約五粁、社は延喜式内名神大社の一で國神武甕槌命を祀る。

青木堰並に二宮尊德先生碑　岩瀬驛から西南約四粁、眞壁郡大國村大字青木にあり。この村かつて大いに疲弊し、村民その貧に苦しんで、他鄉に赴かんとまで考へてゐた時、尊德先生此村に來り、村民に各唐鍬一丁宛を與へて、荒蕪の土地を開墾させた。そしてこの疲弊が櫻川の氾濫によつて田畑を荒廢させるに基づくを救はんといろ〳〵と工夫された。そこで設計を立てられて壞れたる用水堰を修繕し、よくその氾濫を防ぎ、安全に耕作し得られるやうにした。先生の此業に從ふや身は青木に居らず、遠く栃木縣芳賀郡より通勤して勵精大に勤めた。村民は朝早くより起き相共に働きたれども、先生の物部よりこゝに來るや、常に村民よりも早かつたといはれてゐる。これを以つても先生の勵精振が想像される。村民は深くその德に感じ、勤勉よく業を勵んだので、先の貧村は忽ちに今日の富村となつた。こゝに於て村民は先生の宏大な恩德に感謝し、永くその功德を欽仰し、之を傳へんとして碑を建てた。その篆額には報德先生碑と書いてある。

筑波線――雨引驛

雨引山　又天彦山ともいつたが、雨乞のことから雨を引くといふ意味で雨引山といはれるに至つた。雨引村本木から登るがよい。海拔四〇九米、老杉古松を交へて繁茂し、幽邃掬すべき仙境である。中腹に觀音堂がある。

雨引觀世音　眞壁郡雨引村大字本木樂法寺内にあり。驛より東北に方りて約三、五粁、山の中腹にあり。樂法寺は用明天皇の御宇、梁の法輪獨守居士渡來し、この地に道場を草創したと傳へられてゐる。推古天皇御惱平癒の祈願感應速かなるにより、堂塔伽藍を御造營あらせられ、永く勅願所となされた。その後興廢盛衰を經て今日に至る。眞言宗豐山派に屬し、堂塔の宏壯は地方稀に見る所である。寺内に觀音堂があつて、延命觀世音を安置する、所謂雨引の觀音樣である。堂は明治四十一年九月に合併されたもので、像は木造觀世音菩薩立像（寺傳延命觀世音像）附前立像一軀で、刀法極めて非凡、明治四十四年國寶に指定された。

赤穗義士勝田新左衛門の家並墓碣　新左衛門が赤穗義士四十七士の一人として曉名を走せ、武士の亀鑑と仰がれてゐるのは世間周知のことである。新左衛門は名を武堯、祖先以來代々雨引村に住んでゐたが、父の代から笠間侯淺野氏に仕へ、幾くもなく藩侯に從て赤穗に轉じたのであつた。碑は雨引山樂法寺下の坂路を上り、黑門に達せんとする左側の小墓地内にあり。碑の樣子は略泉岳寺のと同じであ

る。武堯の死後母は二男新兵衛を伴ひて雨引村に歸農す。その子孫今も大字本木に住し家に新左衛門討入姿の木像並に幾多の遺物を藏す。その像は江戸關濫の作であるといふ。

樺穂驛

樺穂村産の石材　驛前には花崗岩の石材が一面に積まれてある。これは皆本村の東に峙つ一帶の山から切出されるもので、實に當村無盡の寶庫である。

加波山　加波山に登るものはこの驛より下りるのが一番よい。加波山は海拔七〇九米、新治、眞壁の兩郡に跨る。全山岩石悉く露出し、奇石怪岩多く嶮峻攀躋に困難な所が多い。山中に加波山三枝祇神社を祀る。遠近の崇敬者多く、登山する者絶えず、殊に夏季行者の先達の下に禪定をする者が頗る多い。

眞壁驛

眞壁町　眞壁郡東部の都會で、戸數千三百二十、人口八千百九十一人、東及南は筑波山・加波山・足尾山の連山を以て取圍まれ山氣町に滿ちて清爽の感じがある。町の大部分は農業を營みて商工業之につぐ。筑波鐵道が開通してからは東一帶の山から切出す花崗岩の石材を移出するやうになつた。縣立農學校がある。明治四十二年町立として創設し、同四十五年郡立となり、大正十二年四月縣立に移管されたものである。

天目山傳正寺ト鐵泉場

傳正寺　眞壁郡樺穂村大字櫻井天目山の中腹にあり、眞壁驛を東に去ること約一・三粁、寺は文永五年八月眞壁城主眞壁安藝守の創立で、法身國師の開山にかゝる。國師俗名眞壁平四郎といひ城主安藝守の草履取りで主人に木履で面を打たれて大に發憤し、苦學力行終に高僧となつたといふ傳說がある。この寺始めは金城峰天目山照明寺と稱して臨濟宗であつたが、文永十年二月國師入寂後康正二年に相州早川海藏寺住持安叟宗楞禪師が來てから曹洞宗總持寺派となり、其後良雄大圓和尙の代に至り淺野禪正長政の歸依する所となり、慶長十六年四月歿するに及んで當寺に葬むる。法號を傳正院殿功山道忠大居士と號す。これから傳正寺と改稱し淺野家の菩提所と定め大檀越となる。境內靈泉

湧き、リユウマチス・神經痛に特效あり。櫻井館之を大石風呂に引き療養に備へてゐる。

淺野長政及同夫人の墓　傳正寺境内にあり、本堂の北一段高き所に靈廟を設く。廟中から高さ二米許の五輪塔が立つてゐる。同夫人並子長重の墓もその側にあつて廟の構造は略長政のに似てゐる。

山の尾　眞壁驛より東へ二粁餘り、花崗岩の「ペグマタイト」をなしてゐる所でザクロ石を出す。

椎尾驛

藥王院　驛より東へ一粁餘、紫尾村大字椎尾の椎尾山腹にあり。桓武天皇の勅に依り延曆元年四月八日、最仙上人の開基せし處である。上人は當縣關本の人、夙に佛門に入りて勤行三昧に入り、定惠兼備す。偶〻上人の在す洞より紫雲たなびきてその光禁闕に及ぶ。帝之を奇とし侍臣に勅してその源を尋ねしめ給ふ。勅使光を便りに尋ねて當山南谷椎の洞に至り、上人に遇ひて修法の意を問ふ。上人答へて唯天下泰平國土安穩を祈る外他事なしと言ふ。勅使上人を伴なひて復奏す。帝叡感あらせられて、本尊として天竺月蓋長者の持佛であつた內裏の持佛藥師瑠璃光如來の尊像を賜はり、七堂伽藍を建立せしめて勅願所となし給ふ。上人は法相宗であつたが、延曆二十年傳敎大師天台宗に改め、天長二年慈覺大師之を再興し。法燈愈〻明を增し香煙益〻馨し。後正保三年四月廿九日野火の災に罹り、本尊を除いて盡く烏有に歸す。ついで延寶八年十月堂塔の再建成る。寶物としては傳敎大師の作なる赤栴檀藥師如來と、藥師十二大將並に因達羅大將等がある。その外慈覺大師の作なる藥師堂、三重塔、樓門、鐘樓、念佛堂、護法堂等がある。

常總線——下妻驛

下妻町　戶數一千三百餘、人口六千九百二十八人、舊多賀谷氏の城址である。縣立中學校、町立實科女學校、下妻區裁判所、水戶刑務所下妻出張所がある。町の西方に砂沼の勝景がある。

光明寺　下妻町字栗山にあり、建保六年明空上人の開山である。上人俗名三浦荒次郎義忠、和田合戰に敗れ、遁世して親鸞上人の弟子となり、六老僧の一人となつた人である。

大寶驛

縣社大寶八幡神社　驛の直前大寶湖畔に鎭坐す。大寶元年藤原時忠宇佐八幡宮を勸請す。源義家、同賴朝等の信仰があつたといふ。本殿は桃山時代の建物で、流れ造といはれ、今國寶となつてゐる。西に大寶沼址を脚下にかまへ、東筑波山脈を眺めて景勝の地、殊に秋菊花の節は遠近參詣の者堵の如く、大寶の團子は地方の一名物として玩味される。

贈正四位關宗祐の墓

關城址

騰波江驛から西へ約二粁、眞壁郡河内村大字關館にあり。大寶湖に斗出せる三角形の丘阜で、東西南の三面は大寶湖に臨み、北は一帶の土壘を以て耕地に接す。藤原秀郷の裔關政家始めて此に城づく。後宗祐その子宗政と共に南朝に應じ、北畠親房及守永親王を奉じて奮鬪七年遂に高師直の陷るる所となり父子枕を竝べて南朝に殉す。實に忠君の亀鑑といふことが出來る。明治甲戌の秋三島中洲この地に來り感慨禁ずる能はず、古風一篇を賦す。曰く

南風不競北風競　四海靡然悉響應　獨見東風競邊海
吹起激波々勢勁　誰駕舟來源宗玄　常陽義擧著先鞭
小田城上敵王愾　孤手三年擎頽天　其奈狼子多反覆
穢氛滿地芳迹蹙　所賴寶湖水清淨　猶颯餘波々怒狀
關城老將忠勇資　迎公奉護湖水涯　德必有隣々城應　三歲久保孤壘危　咄々白河老姦猾
坐擁大兵守巢窟　公爲書促救援　千簡萬扎筆不歇　硯池注盡大湖水　湖水或恐爲之竭
援兵不來國不開　糧盡謀屈城壁頹　魚腹葬盡忠義骨　風波至今帶餘哀　君不聞當時一卷關城書
留在白河舊城墟　白河之水々漫々　臭名千秋洗不除

關氏父子の墓

河内村大字關館字内館にあり、花崗岩五輪塔、高さ一・五米、碑面剝蝕頗る古色を帶び、老榊一株塔後に樹つ。墓側に小山宏撰文の關城の碑がある。慶應三年六月建てたものである。

故いばらき新聞社長飯村丈三郎氏の出地

同氏は上妻村大字黑駒の人、丈五郎氏の長男、少壯出て縣會議員となり、ついで衆議院議員となり大に縣政國政に貢献す。後政界を退きて實業家となり、いばらき新聞社を起して社會の木鐸となり、或は青才會を創め、或は茨城中學校を興して後進の誘掖指導に努めた。

黑子驛

黑子千妙寺

黑子村大字黑子にあつて、驛から東三〇〇米ばかり、慈覺大師の開基にかゝり、天台宗延暦寺末關八州、奥羽十ヶ國の總本山である、本尊は釋迦如來で、奮然の作にかゝり、嵯峨清源院釋迦

像と一對のもので立像丈四尺栴檀の木を以て彫刻され。興良親王の奉納されたものといふ。

岡田寒泉の碑　黑子驛を東へ四粁餘り、眞壁郡上野村大字寺上野、鹿島神社の境内にあり。碑は高さ一・六米ばかり、天保四年春三月の建設にかゝる。碑文は筑波郡板橋村の岡田寒泉先生碑と同じ、同先生の事蹟はその部にゆづる。

關本町　眞壁郡西部の小都會で、常總線太田鄕驛からの支線が通じて居る。戶數九百餘、人口五千二百餘、附近村落に產する梨は、皆この地に集まりて各地に移出される。即ち關本梨と稱し美味と產額の多きを以て遠近に知られてゐる。縣立第二蠶業試驗場がある。

舟玉古墳　關本町の北端大字舟玉にある、早く發掘されて外形も崩れ、埋藏物も持ち去られたが、玄室內に仄かに殘る壁畫は、類稀なるものとして有名である。附近に尙古墳が多い。

結城郡

概說

沿革　神武天皇即位の五年、天富命勅命を奉じ阿波の齊部の一部を率ゐて沃地を東方に求め、麻穀を植ゑて地を相し、良麻を產した地方を名けて總（ふさ）といひ、穀の木の繁茂した地方を名けて木綿（ゆふき）と稱へた。これが結城國の起原である。後孝德天皇の世國郡の制が布かれ、結城國を郡として下總國に隷せしめ、後更に郡の南半を割いて岡田郡を置き、醍醐天皇の延喜年中之を豐田郡と改めた。朱雀天皇の承平年中から天慶の初にかけ、平將門兵を擧げて屢常陸の同族と爭ひ、次で坂東諸國を侵掠して、所謂天慶の大亂を釀したが、其本據は此豐田郡であつた。鎌倉時代以後結城郡は小山の族結城氏に、豐田郡は大掾の族豐田氏の領有に歸し、戰國騷亂の時代に入つてから、結城の方は動かなかつたが、豐田地方は下妻城主多賀谷氏に併呑された。江戶時代結城は水野氏の城下となり。豐田は幕府の直轄に歸し、慶長年中伊奈備前守忠次、享保年中伊澤彌惣兵衞爲永等治水墾田の事業を成し、鬼怒・小貝兩河間竝に飯沼址に於て現に見るが如き廣大な美田を拓いた。貞享三年鬼怒川に西を豐田郡から割いて、岡田郡を置き、

三郡分立となつたが、明治維新後茨城縣の管下に入り、同二十九年三郡を合して現在の結城郡とした。郡役所は中央に近い宗道村に置かれたが、郡の首腦地は歴史的並に產業的關係から兩端の結城・水海道兩町にある。

地勢・戸口　東面一帶は鬼怒川・絲繰川を隔てゝ眞壁郡に、小貝川を隔てゝ筑波郡に堺し、南は飯沼水路及毛野川故道によつて北相馬郡に接し、西は飯沼及其地溝に依つて猿島郡に對し、西北及び北は飯沼上流の細溝並に田川を以て栃木縣下都賀郡に連る。全郡平坦で山無く、舊結城・岡田の地は林野多く、舊豊田の地は豊饒の美田に富む。面積約二七一方粁、戸數約一萬八千三百、人口十萬五千六百餘、三町二十四ヶ村に區劃する。

教育　小學校は尋常校二、併置校二七あり、實業補習學校三〇、青年訓練所二七、其他の學校には縣立水海道中學校・同水海道高等女學校・同結城農學校・町立結城實科高等女學校等あり。郡教育會は事務所を結城小學校に置き、結城・西豊田・石下・水海道の四部會に分つ。

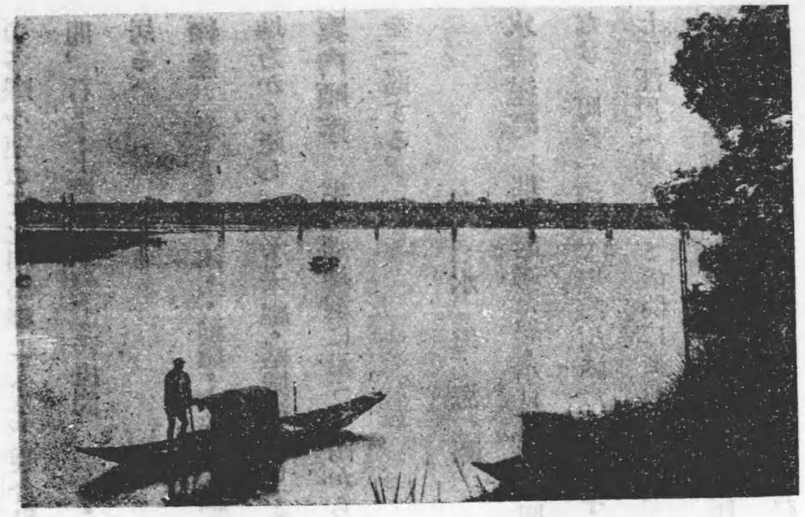
交通　鐵道の郡内を通ずるものは水戸線及常總線で、前者は小山から東して本郡に入り結城驛となり、更に東して眞壁郡に入り、常總線は眞壁郡下妻驛を經て本郡に入り、宗道・石下・三妻・中妻・水海道の各驛を連ねて北相馬郡に入る。乘合自動車線亦普及し、水海道・下妻間、水海道・岩井間、三妻・上郷間、石下・上郷間、石下・沓掛間、宗道・吉沼間、下妻・諸川間、結城・境間、結城・下妻間等縱横に通じて居る。

物產　米・麥・繭・生糸・紬織・木綿・干瓢等を主なるものとし、就中木綿は石下地方から、紬織は結城町地方から產し、石下木綿・結城紬として名高い。

案内順序　先づ常總線に沿うて南から順次名所舊跡を索り、後結城を中心として附近を紹介して全郡を一巡する。

水道海驛

水海道町　郡の南端鬼怒・小貝兩川の間に夾まる。戸數約一千五百、人口約七千、縣南商業の一中心をなす。町西を流るゝ鬼怒川は舟楫を通ずること十數里に及び、遠く江戸時代から利根・江戸兩河と連絡して江戸（東京）との間に交通があり、明治以後も鐵道開通以前は本縣の玄關口として貨物集散の要衝に當り、商業殷賑を極めた有樣は、河岸に殘る倉庫の狀況によつて偲ばれる。常磐線開通後頓に衰へ、常總線の開通によつてやゝ恢復したけれども、昔程には行かぬ模樣である。報國寺・縣立中學校・同高等



鬼怒川

女學校・私立菁莪學館・同幼稚園等がある。鬼怒川に架せる豐水橋は縣内有數の長橋である。

報恩寺　豐岡村元報恩寺にある、眞宗大谷派に屬し、建保二年二月性信上人の開基である。上人は本縣鹿島の人、神宮宮司大中臣宗基の嫡男十八歳にして出家得道し、親鸞上人の弟子となり性眞坊と稱した。親鸞が稻田の草庵で草した教行信證六卷の草稿を授與せられたのは此人で、笈と共に永く此寺に傳はつた由緒の深い寺院であつた。慶長五年多賀谷の騷亂に兵火に罹り堂宇灰燼に歸し、七年武藏に再興を見たが、同十七年舊地に一宇を建て武藏報恩寺の支坊とし、尙報恩寺と稱した。

中妻驛

弘經寺　豐岡村大字飯沼にあつて、中妻驛より西へ約一、三粁。淨土宗鎭西派に隷し、十八檀林の第八位に位する。應永二十一年八月了肇和尙（北條相模守の族、名越右馬允の子）の開山にかゝる。三世曜譽、四世一譽は參内して香衣を賜はり、五世鎭譽の時、雨を祈つて叡感に預かり、後奈良天皇より勅額及勅願所の綸旨を賜はつた。十世了學は將軍德川秀忠の女である千姫（豐臣秀頼の室）の歸依厚く、現在の堂宇を再建して功德寺とした。千姫薨ずるや、遺骸をこの寺域に葬り、碑を建つ。碑面には天樹院殿榮譽源法杉山大姉と刻まれてある。寛文六年丙午二月六日。十一世南譽は勅を奉じて淨敎を禁裡に講じ、常紫衣餘寺不混の綸旨を賜はつた。六十九世洞譽に至り、明治二年二月二十二日再び勅願所の綸旨を賜ひ、十八年十一月一日、古社寺保存法により保存資金一百五十圓を下賜された。惜しいことには三十九年五月十四日火災に遭ひ伽藍記錄烏有に歸し、今わづかに本堂を殘すのみとなつた。

累の墓　怪談絹川の累の墓で、中妻驛の西約七〇〇米、大花羽村大字羽生寶藏寺の域内にある。傳へ言ふ、累女は極めて醜婦であつたので、夫與右衛門は之を嫌ひ累女が刈豆を背負つて歸る途中、之を絹川の深淵に蹴落して殺した。その後累女の怨靈が、夫與右衛門に祟つて所謂怪談となつた。後飯沼弘經寺の名僧祐天和尙の法力により、怨靈が解脫したとのことである。累女の一代記は今法藏寺の藏本とな

つて殘つてゐる。

三妻驛

大生郷天滿宮　驛を西へ去ること約四粁、菅原村大字大生郷の西南角飯沼に蔭める丘阜の上にある。古の常陸下總菅原神社であつて、菅原道眞の遺骨はここに葬られたといはれ、その社傳によると『菅公の第三子三郎景行父道眞公を筑紫に省す、公自ら鏡を採りて自畫像を描き、授けて曰く吾死なば茶毘して遺骨を他郷に葬れと、景行遺言を奉じ文治二年此地に創祀す。朱印三十石、後年郷人更に東方に景行を祀り、三郎天神と稱す』といはれてゐる。景行常陸介となり、任地に赴くや菅公の遺骨を携へ、延長四年四月羽鳥の勝景に墳域を奠め、大掾源護上總介良兼等の贊助を得て菅原神社を創祀し、後任滿ちて京に歸るや、二弟と共に東下し、延長七年更に大生郷に奉遷し、安樂寺を建てゝ別當とした。社傳の文治二年は延長七年の誤である。思ふに延長四年は天曆元年に北野の創祀に先つこと二十一年、本官追復後三年であるから、羽鳥の菅廟は恐らくは我國最古の菅神社なるべく、大生郷と雖も北野創祀の十八年前なれば、たとへ年代に於ては第二位であつても、遺骨は尙本殿に祕封されてゐるのを見る時は、筑紫の安樂寺は單に遺物を埋葬するに過ぎずして、眞の菅公墳墓の地は大生郷であるといふことが出來る。

滿倉元三大師　西南へ約一・六粁大花羽村字滿倉安樂寺内にある。德川家光、元三大師の遺骨を納めた所。毎月三日遠近の善男善女參詣するもの頗る多い。

石下驛

石下町　戸數千六十餘。人口五千三百餘。郡の中央に位し、石下木線の產を以て有名である。尙本町外六ケ村聯合耕地整理は、その規模の大きいことに於て、實に本縣第一と稱せらる。驛の附近には縣立農事試驗場原種圃がある。

平將門遺趾　平將門は、日本紀略並將門記等正確な史料によつて研究すれば、疑も無く下總國豐田郷の住人であつて、從來の相馬の守谷に楯籠つたといふ說は誤りで、其本據は當時の豐田郷であつたのである。豐田郷は大體今日の岡田村を中心として東は石下町西は飯沼村に及び、鬼怒川の水路は石下の東邊の低地を傳へて南下し、其間に廣漠たる美田が開かれて居たので、良持・將門父子の住した豐田館は、これ等美田を一睥に瞰下する向石下城址に建てられてあつたと推せられる。豐田館は承平七年八月叔父良兼の爲に燒かれたので、其後大方郷**鎌輪**（大形村鎌庭）猿島郡**石井**郷（岩井）等の別館に假住ひして、追て**國亨**（國生）の南方の臺地に新館を營む計畫だけでまだ建築に取かゝらぬ中、貞盛・秀郷等

に攻め込まれ、天慶三年二月十四日**石井**に於て戰死したのである。將門の墳墓も岡田村の地内にあるものゝ如く、同村の南端字神子女の雜木林中に、建長年中に建てられた供養碑らしいものが殘り、其日附に**二月十四日**と見えるなど、淺からぬ因縁を物語つて居る。新石下の西福寺門前の碑も、百餘年前此處から移されたものである。

宗道驛

宗道村　結城郡の中央に位し、郡制廢止前は永く結城郡役所の所在地であつた。絹川に沿ひて、德川幕府時代に筑波の西北と江戸との交通の衝に當りし宗道河岸はこの地にある。

下妻驛

水野家累代の墓　結城郡山川村大字新宿萬松寺の境内にあり、下妻驛を去る西北八粁餘。水野家初代の監物忠元公より十一代忠邦公に至るまでの墳墓は皆この寺内に存す。忠邦が天保改革の大立物であつたことは周知のことである。

山川不動尊　同郡同村大字新宿にあり。下妻より八粁餘り。本尊は弘法大師の作にかゝり、元は京都東寺内に安置せられたが、平將門之を尊信し、彼が東下の際密に携へ來りて守本尊としたと傳へられる。將門陣歿後その臣坂田時行これを山川の外城に隱し、後慶長六年大惠寺を創設してここに安置す。この寺後に大榮寺と改む。

模範村西豊田村　下妻驛より西へ約一粁、鬼怒川の架橋を渡つて本村に入る、

（彊域）縣の西南部に位し、東は鬼怒川を隔てゝ眞壁郡上妻村及結城郡總上村に對し、西は中結城、下結城の二村と界し、南は安靜、大形の兩村と犬牙相交り北は眞壁郡川西村と相隣す。

（地勢）地は鬼怒川流域に屬し。岡陵池沼等少く、平坦にして沃野に富む。

（交通）下妻町より古河町に通ずる縣道村の北部を貫き境町に至る路線は大字若より分岐す。村内重要の村道は大正元年以降連年の大改修により其の効用著しく鬼怒川の流域亦舟楫の便あり。常總線下妻驛には鬼怒川橋を經一里餘にして達し。水陸運輸の便尠からず。

（廣袤・面積・戸數・人口）廣袤東西一里十四町南北亦一里十四町にして其面積〇、七七三八方里とす。戸數八百十六戸。人口五千百人。

（村是の概要）大正元年に調査を完了しその實行組合を組織して之が遂行に努めて其の效果見るべきもの多い其の大綱は次のやうである。

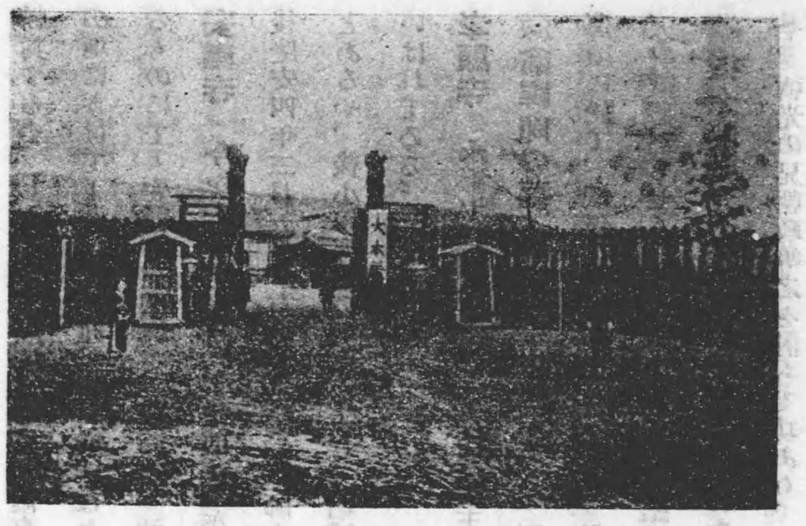
教育の振興　普通教育振興、實業及補習教育の普及、

産業の奬勵　米麥作改良・牛馬耕の普及・堆肥舍普及・綠肥栽培・耕地整理・桑園及養蠶改良・製茶改良、家畜家禽の飼養、副業の奬勵、道路改修此の他　**矯風　衛生　各種團体の活動**　等見るべきものあり。

（村是實行の效果）村是制定後村民は一致共力之が實行に努力し、よくその成績を擧げつゝあり。乃ち吏員の養成訓練をなしては信望ある吏員を出し、事務の整理を行つては村治の能率を擧げた。選擧は全く人物を本位として圓滿穩健の議員を選出し、納稅の如き明治四十年稅務監督局長の表彰をうけたるを始めとして前後數回の表彰をうけるに至つた。小學校は尋常小學校、尋常高等小學校の二校を有し、補習教育社會教育亦實績顯著である。産業上に於ては村農會實行組合、地主會産業組合、耕地整理組合等の諸會合を設けて鋭意産業の奬勵改善に資した。道路の改修は特に力を致した結果、里道も全く縣道に劣らぬ良道となり。その行屆いてゐる狀況は縣下稀に見る所である。衛生方面に於てもその思想普及の施設を講じ隔離病舍を建て、毎年春秋二季に講演會を開き又衛生組合を設けて自治的に衛生の道を講ずるやうにした。淳朴、質素、勤勉、儉約の氣風は全村をおほふの狀態となつた。

（縣及内務省の表彰）著々實效を擧げたが縣及内務省の認むる所となつて明治四十二年一月四日附を以て縣の表彰を受けついで、内務省より優良町村として表をうけた。

（朝鮮面官吏の實地視察）大正十二年朝鮮面吏本村に來り居ること數ヶ月、親しく本村の實況を視察研究をして歸つた。



結城　水戸線 ―― 結城驛

大結城町、結城郡最北の都會で、戸數二千七百餘。人口一萬五千餘、半商半農の土地である。有名な結城紬はこの町から出るのである。縣立農學校。町立實科高等女學校、縣立工業試驗場がある。又小學校は明治四十年十一月特別大演習の際に十一月十四日より同二十日まで　明治大帝の行在所たるの光榮を有してゐる。この地鎌倉時代に結城七郎朝光の食邑となり、下りて結城秀康に及び、越前福井に

轉封するや、したがつて歴城となり、爾來代官の支配地たりしも、元祿十三年水野隱岐守勝長の封をこの地にうけてより、代々同氏の居城となりて王政維新に至る。又寺院の多きこと縣下に類なく、有名なるものにても安穩寺、弘經寺、孝顯寺、妙國寺、華藏寺、乘國寺、稱名寺等を數へることが出來る。

安穩寺　今を去る一千百五十年前、天平寶字年間、唐土鑑眞和尙第二の徒弟稱蓮律師草創にかゝる。後慶安四年三月五日、有名なる源翁禪師を請ひて兩開山となす。源翁禪師の那須野ヶ原殺生石化度のことあるや、後小松天皇の叡感を蒙り。結城山の勅額を賜はる。德川秀康、同家光等の尊信も厚かつたといはれてゐる。

孝顯寺　永正十二年の開山で、結城藩主代々の菩提所である。

源翁禪師の墓　結城町字玉岡にあり。師は越後國萩村の人、名を心昭、空外と號す。元中三年下野國那須に於て、妖狐化して殺生石となり、衆民を惱ますこと多きを聞き、身を挺して之を化度す。後小松天皇叡感あらせられて禪師の安穩寺に結城山の勅額を賜はり、又大寂院法王能昭禪師の勅號を賜はる。

結城七郎朝光の墓　結城町稱名寺にあり。朝光は藤原秀郷の裔である。養和元年志田義廣亂を作すや、朝光の兄朝政等之を討ちて功あり。功を以て常總兩毛に亙る義廣一族の地を兄弟に賜はる。朝光が結城を食邑とし、結城を以て氏としたのも此時からである。元曆、文治の交には平家を討ちて功あり。賴朝の藤原泰衡を陸奥に討つや又從つて功を立つ。これを以て賴朝の信任を受く。建長六年正月二十四日、八十七歳を以て卒す。朝光の築いたと稱する**結城城址**は、町の東北隅、田川を帶びて尙往古の面影を留め、尙朝光が主賴朝の遺髮を埋めたといはれる**大將塚**（一名毛塚）も字立野にある。

猿島郡

概說

沿革　本郡の地域は舊猿島郡と舊葛飾郡の一部とを含む。中世以後下河邊庄に入り、鎌倉時代には藤原秀郷の裔下河邊氏の所領であつた。室町騷亂の世、足利成氏鎌倉から古河城に移り。此地を根據として常總野諸國の將士を率ゐ、連年上杉氏と戰を交へ、爾來政氏・高基・晴氏相繼で此城に據り、天文年中小田原の北條氏康に併呑せられた。江戸時代には古河に藩が置かれ、德川の重臣が相代つて此處に封ぜ

られたが、寶暦以後は永く土井氏の居城となつて幕末に及んだ。明治維新後廢藩置縣の際印旛縣の所管となり、明治八年茨城縣の管轄に入つた。明治二十九年四月當時の猿島・西葛飾兩郡を合して現在の猿島郡とし、爾來森戸・長須・中川・古河等諸町村の地域に多少の變更を經て今日に到つた。首腦地は中央の境町、南部の岩井町、西部の古河町に指を屈する。

地勢・戸口　本郡は縣の西端に位し、南及西は利根川・渡良瀬川を隔てゝ千葉縣東葛飾郡及埼玉縣北葛飾郡に對し、北は栃木縣下都賀郡に接し、東は結城・北相馬二郡と飯沼並其下流を以て堺す。地勢西北から東南に延び、概ね平坦で丘陵無く、利根川に沿ひ、北から南に延びた狹長な湖沼が并列し、一部は干拓せられて水田となつたが尙鵠戸・菅生等の沼は水を湛へて居る。利根川は本來武藏を通じて江戸灣に流れたのを、江戸幕府に於て屢河道の改修を行ひ、承應三年（皇紀二三一四年）伊奈半左衛門忠勝が中田・境間に赤堀川を堀鑿して利根下流の一部を東に移してから、年々水路を取擴げ、終に之が利根の本流となつて關東の水脈に大變動を來したのである。郡の面積約三一八方粁、戸數一萬九千六百餘、人口十一萬四千六百餘に上り、三町二十二ヶ村に區劃する。

教育　小學校は尋常校二、併置校二七あり、實業補習學校二八、青年訓練所二五、其他の學校には縣立境中學校・同古河商業學校・町立古河實科高等女學校・組合立岩井實科高等女學校・私立盈科學校・同育成學校等がある。郡教育會は事務所を境小學校内に置き、西部（古河）・中部（境）・南部（中川）・北部（幸島）の四部會に別れて居る。

猿島の茶園

交通　本郡は鐵道に惠まれず、僅に西端に東北本線の古河驛を見るだけであるが、乘合自動車線はやゝ普及し、古河・境間、古河・諸川間、境・結城間、境・沓掛間、境・岩井間、岩井・水海道間、岩井・沓掛間、沓掛・石下間、諸川・下妻間、境・下妻間等があり、大に交通の便を助けて居る。尙利根水路を利用する汽船や自動艇の運轉も行はれて居る。

物産　米・麥・甘藷・煙草・茶・繭・生糸・清酒・醬油等を產し、就中茶は猿島茶と稱し輸出品として名あり、多く南部及西部に栽培される、生糸は古河を中心とする。

案内順序　先づ古河及其附近から中部に移り、最後岩井附近を説いて全郡を終る。

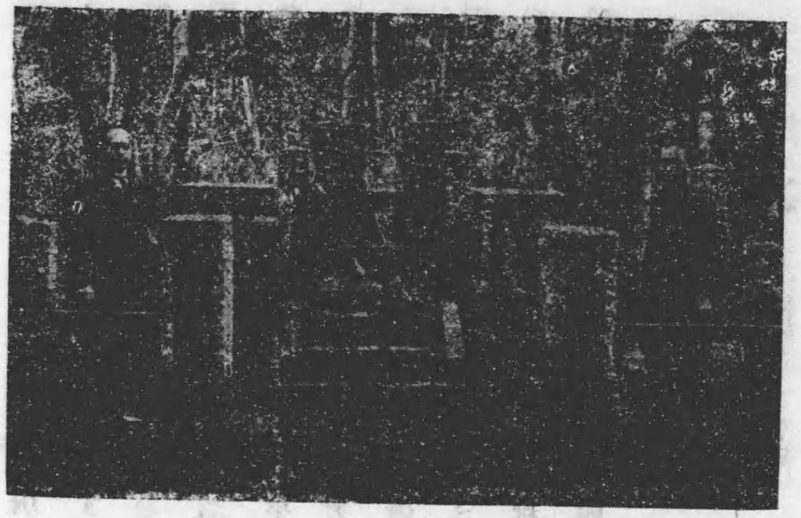
古河驛

古河町　本縣西南隅の一都會で、栃木縣埼玉縣に近く、三縣文化の接觸地となつてゐる。戸數三千六百餘、人口一萬八千餘、縣立商業學校、町立實科高等女學校、私立盈科學校がある。古の古河公方の居つた所であることは有名なことである。

古河城址　古河町の西端にあつて下河邊氏始めてこゝに城き、數世相繼ぎ、後足利成氏この城による に及んで名聲振ふに至つた。爾來數代を經て土井氏の居城となつた。今や昔日の砦壘壍濠概ね田圃となり刀水の流に陷りて僅かに往時を追懷し得るに止まるも、一度利根の長堤に立ちて四方を觀る時はその規模の如何に大きかつたかを思ひ見ることが出來よう。

賴政神社　古河町にあり。源賴政を祀る。賴政の宇治に於て自刄するや、その臣下河邊清恒その首級を笈に入れて下總に歸りこの地に葬つたと言ひ傳へてゐる。

光了寺　古河町を去る東へ四粁新鄕村にあり。建保四年の創立で、寺に源義經の鐙、靜御前の舞衣、その他稀代の珍品寶物を藏して居る。



熊澤蕃山の墓

熊澤蕃山の墓　驛を東南にはなるゝこと約二粁餘、勝鹿村鮭延寺にあり。本堂の傍を過ぎて杉の森陰深き處に石欄に圍まれて二基の墓石がある。これが蕃山及その室矢部氏の墓である。碑面には熊澤息遊軒伯繼と刻す。蕃山年十六にして備前侯池田光政に仕へ、後仕を辭し中江藤樹の門に遊び陽明學の蘊奥を窮め、二十七歳再び備前に仕へ、その重臣として樞機に參與し、藩老等に忌まれ明暦二年仕を辭し京に寓したが、後幕府の忌諱に觸れ、和州郡山に幽閉せられ、貞享四年古河に移され、元祿四年八月經綸を施す能はずして空しく此の地に歿した。ついで儒禮を以てこの地に葬られたのである。

境町　古河驛より東へ一二粁餘り、自動車の便あり。戸數八百四十一、人口四千五百五十一、猿島郡の中央に位

し、縣立中學校の所在地である。利根川に沿ひ往時北總並常陸地方と江戸との舟楫の要津であつた。今でも尙汽船によつて東京との交通をなす。

水海道驛

岩井町　水海道驛から西へ一二粁餘り、自動車の便あり。猿島郡の南部の都會で、組合立實科高等女學校、私立育成學校等がある。附近に平將門の古墳あり。次にその二三を述べよう。

國王神社　岩井町から弓馬田村に通ずる路傍にあつて、大己貴命を祀る。將門戰歿の所であるといはれてゐる。祠中に鬼神丸と稱する無銘の大刀及舞刀、鏡、古扇等を藏す。一說にこの神社は將門を祀るこもいつてゐる。地方の人尊信すること甚深い。

富士見の馬場　岩井町より北、七重村に到る途中にあつて、將門の調馬をした所と傳へられる。

島の藥師　延命寺內にあつて、將門の守本尊として、その在世當時は非常に信仰したといはれてゐる。

北相馬郡

概說

沿革　本郡は往古相馬郡と稱し、利根川の南北に跨つて居た。鎌倉時代以後千葉の一族相馬氏の所領に歸し、本城を守谷に築いて永く此地を治めたが、天正の末小田原に黨して豐臣秀吉の爲に滅された。江戸時代に入つては佐倉藩其他の領地となり、郡內には獨立の藩は無かつた。明治維新後新治縣に屬し、明治八年新治縣の廢止と同時に郡は南北に二分され、南は千葉縣北は本縣の管下に入り、今日に及ぶ。取手町は本縣の玄關口を占め本郡の首腦地をなして居る。

地勢・戸口　本郡は縣の西南端に位し、東は稻敷郡に接し、南は利根川を隔てゝ千葉縣の印旛・東葛飾兩郡に對し、西北は猿島・結城兩郡に接し、北は小貝川を挾んで筑波郡に對する。四境江水を環らし地勢、概ね平坦である。面積約一七六方粁、戸數九千二百餘、人口五萬一千餘で、四町二十ケ村に區劃し、本縣最小の郡である。

教育　小學校は尋常校一、併置校二四あり、實業補習學校二五、靑年訓練所二五あり、其他の學校に

は縣立取手農學校・組合立取手實科高等女學校・私立育英學舍等がある。郡教育會は事務所を郡自治會館に置き、北部（守谷）・中部（山王）・東部（布川）の三部會に別れて居る。

交通　鐵道には常磐・常總の二線があつて、前者は利根川鐵橋を越えて本郡に入り取手・藤代兩驛を經て稻敷郡に入り、後者は取手驛から分岐し、郡の西半を貫通し寺原・稻戸井・守谷・小絹諸驛を經て結城郡に入り、交通上多大の效果を擧けて居る。乘合自動車線には取手・水海道間、取手・谷田部間、取手・布川間、布川・龍ヶ崎間等に開かれ、鐵道と相俟つて交通に便して居る。其他利根川の汽船も大に運輸交通を助けて居るが、近年布川地先の榮橋、取手地先の大利根橋が相次で竣功し、千葉縣並東京方面との交通至便となつた結果、貨物自動車の往來頗る頻繁となつた。

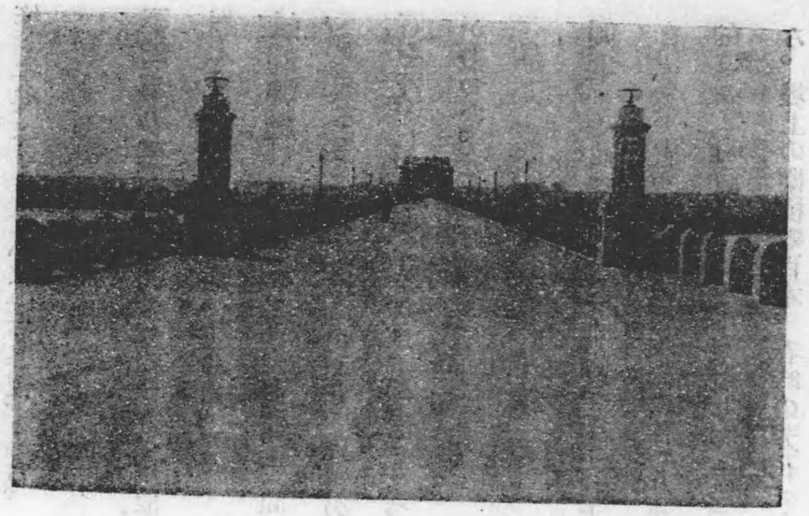
物産　主要物産は農產物で、米・麥・繭を最とし、次に清酒・醬油・生糸・水產物等である。

案內順序　取手を起點として其附近から東部を說き、次に常總線に沿うて西部を一巡する。

取手驛

取手町　この地は本縣の玄關口の位置を占め、下館、取手を連ねる常總線はこの驛を分岐點とする。近年千葉縣に通ずる大利根橋の開通により交通の便大に加はる。奈良漬はこの町の名產である。附近の著名なものには次のやうなものがある。

長禪寺　本町大字取手にある名刹で、驛を去ること約百米の東にある。承平元年平將門の創立と傳へ、慶安年間には德川將軍から章書を與へられてゐる。相馬八十八ヶ所の本地で、地藏尊及觀音大師のお堂もあり參詣人が常に絕えない。



大利根橋

本多重次兄弟の墓　井野村大字井野の本願寺內にある。重次は德川廣忠、家康に歷仕し、屢〻戰功を立てたが、かつて家康の勘氣を受けて本郡に移り、慶長元年この地に卒去した。弟の重玄も亦家康に仕へて戰功があつた。永祿元年三河の寺部城を攻めるに方り、先登の功を樹て、戰死した。享保年間に遠孫墓を本寺に修築したものである。

育英學舍　山王村にあり、高等小學校卒業生を收容す、

修業年限二ヶ年の私立中等學校である。

佐貫驛及龍ヶ崎驛

平國香の墓　佐貫驛より約一粁、川原代村安樂寺内に一小塚がある。常陸の大掾平國香墓と言傳へ、塚上に五輪の石塔が建つてゐる。

蛟蜎神社　龍ヶ崎驛から約七粁。文間村大字立木にあつて、祭神は水波能女命、塡山比賣命である。文武天皇二年の創始にかゝり、延喜の制には之を式内に列した。慶長九年大將軍德川家康は圭田五十石を寄進し、享保元年八月正一位となつた。明治四年には鄕社となり、靈驗顯著な神として近鄕の信仰があつい。

寺原驛

岡堰　寺原驛から約一・六粁、山王村大字岡地先の小貝川にある、今から二百餘年前、寛永年間關東代官伊奈半十郎小貝川の大改修に伴ひ此處に土堰を築き、灌漑の便に資し、爾來之が改修を續行した。現在の堰は明治三十二年に築造したもので、その灌漑區域は山王村外二町五ヶ村實に二千町歩に及んでゐる。堤上の櫻樹數百本、春時の芳花となり、夏時の綠蔭となり、地方人士、風流墨客享樂の巷をなす。

岡堰

この堰は上流の岡堰・下流の十余田堰と合せて小貝川の三堰と稱せられ、本縣治水灌漑上の施設として重要視されてゐる。尙近傍に間宮倫宗先生發祥地の碑がある。

稻戸井驛

三佛堂　驛から約二〇〇米、稻戸井村大字米の井にあつて、彌陀菩薩を安置する。創立の年度は分明しないが、本尊は佛師運慶の作にかゝるものと傳へられてゐる。明治二十一年内務省から該堂の保存資金を下附せられた。

守谷驛

平將門館址　守谷町字城内にあつて、驛を去ること東北に一粁餘、平新皇將門之を築き、その後裔相馬氏がこの舊址によつたと傳へてゐるが、今は僅に殘れる土壘のみが、その當時の俤を偲ばせてゐる。

一書主明神　驛の西約八粁、菅生村大塚戸にある。

——改訂茨城大觀終り——

本書表紙の書名は改訂委員荒井氏の書
寫眞は本會事務所所在の茨城縣廳

昭和七年八月卅一日印刷
昭和七年九月九日發行

【定價金五拾錢】

編輯者　茨城縣教育會
右代表者　水戸市上市備前町八二二番地　齋田十二
印刷兼發行人　水戸市下市東柵町八番地　小池幸太郎
印刷所　水戸市上市北三ノ丸百廿番地　改訂茨城大觀印刷所
發行所　水戸市茨城縣廳學務課內　茨城縣教育會
振替東京一八〇〇九番

不許複製

終